

2014.6.16

戦跡や被災地など地域の負の遺産を観光対象とする、ダークツーリズムという考え方が注目を集め始めている。昨年11月には『福島第一原発観光地化計画』(ゲンロン)という刺激的な題名の論考集が出版され、話題を呼んだ。

共著者の一人である追手門学院大の井出明准教授(観光学)によると、ダークツーリズムはアウシュビッツ収容所などナチスドイツの施設観光研究を中心に約20年前に欧州で提唱された。もともとツーリズムという言葉には娯楽としての観光旅行のほかに学びや相互理解の意も含まれており、「人類の悲しみを継承し亡くなった方を共に悼む旅」として既に国際的に定着した概念という。

日本でも広島、長崎の被爆地や沖縄の戦跡が対象となっているが、井出准教授は「熊本県も重要なダークツーリズムポイントになりうる」と指摘している。

対象地として挙げているのは水俣

射程 熊本のダークツーリズム

市、国立ハンセン病療養所菊池恵楓園(合志市)、万田坑(荒尾市)などの旧三井三池炭鉱だ。水俣は公害、恵楓園は人権・差別、三井三池炭鉱も強制連行や労働争議、炭じん爆発事故など労働問題の負の歴史を抱える。井出准教授は昨年4月に現地を視察し、「それぞれ日本の近代化のゆがみが如実に現れた地域であり、近代史の意味を多面的に学ぶことができる貴重な文化遺産」と受け止めたという。

水俣でも恵楓園でも負の歴史に向き合い継承しようという動きが進んでいるが、世界文化遺産の国内候補となり、文化遺産としての国際アピールでは先行している三井三池炭鉱はどうか。今のところ、産業革命への貢献という「正の側面」ばかりが強調されているのが気にかかる。ダークツーリズムの視点を取り入れ、多面的に歴史を継承することも必要だろう。遺産登録ではそつした取り組みも問われるはずだ。(泉潤)